

サービランニングの成果と将来設計の見直し

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 小栗大季

活動先：サポートちた

岡本ゼミ

この度のレポートでは、私自身が所属している岡本ゼミナールでのゼミの活動で一年間の間で行ってきた中のうちまずはサービランニングでの活動で感じた、成長したことや気づいたことなどについて述べていこうと思う。

さて、まず私がサービランニングで行ってきた活動先はどこかというところ、主に中間支援活動を行っているサポートちたというところだ。ここは、知多に存在する他のNPO団体法人や福祉施設との連携や交流、支援に大変大きく力を入れていることが有名で、福祉施設と福祉施設を結ぶサポートをしているところであるのだ。私はそのサポートちたの活動内容に興味を持ち、サービランニングの活動先にすることを決意することにした。そこでの活動は主に六日間ほどあるのだが、

まず初日のサービランニングの活動ではサポート知多が実際に支援を行っているという施設を全体的にピックアップしていき、その中から我々のグループで興味のあるところを選んでいき、そして二日目からは選んだ施設へと移動して訪問して代表者の方々からお話しをお聞きするというのを繰り返し行っていく。これによって様々なジャンルの施設を調べることができ、分類をしたり比較をしたりしていくことで見えてきたり捉えられたりするものがあるのである。またその中で訪問をした施設先同士でのつながりや交流支援をしていることがあることが分かったのだ。

これにより私は地域のつながりについてとても関心を持つことができ、施設も含めて人と人をつなげることができるこのサポートちたが行っている中間支援活動に関して私は大変刺激を受けることがあり、この先の将来の仕事のビジョンに取り入れたいと思う1つになったといっても過言ではなかった。

これにより冒頭で述べたまず私がサービランニングの活動で成長したなと思うことについては、中間支援の細かいところまでの内容と支援施設の話しを聞いたり知ったりすることで、活動前とは明らかに知識と理解が格段と深まったことであることは確かであると思うし、何より実際に自分の目で活動先を見たり、直接代表者の方々からお話を聞くことによって将来や大まかに地域の福祉というものに対する考え方が大きく変わっていったということである。特に複数の施設を見ることによって、様々なジャンルの分野の視野が広がっていき、施設に行かずしては発見することのできなかつた将来や福祉の方向性について視野に入れることができたのである。これがとても影響が大きかったと自分で思っている。

引き続いて、二つ目はサービランニングでの活動全体を通して気づいたことについて述べていこうと思うのだが、これは極端に言えば「地域とのつながり」であるのだがサービランニングの活動期間中、これでもかというほどこの「地域とのつながり」が今回で訪問したどの施設で考察して思い出してみても強調されていたというイメージと記憶が多い。その中でもこの「つながり」という文字には相当な強いパワーや深い意味

があるなということが間違いなく思ったのである。また、この「つながり」ということばに関しては地域の分野には関わらず全てのありとあらゆる福祉というものにつながっていて、それはその福祉の原点に通じているものなのではないのかと私はそう感じたのであった。

つまり今回のサービスランニングの活動で私は、「地域とのつながり」ということがこの福祉という幅広い分野の全てに関して、いかに大切なのかということに気づくことができたということであったのだ。

以上がこのサービスランニングでの活動で私が成長したと気づいたと思うことだ。

最後は、私がこの一年間のゼミでの活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について活動を通して、活動先が取り組んでいる社会の関わりや気づきから、活動を通して見えてきた地域のことや市民活動について整理してまとめていこうと思う。まずは、先ほど述べていたサービスランニングの中から、活動全体を通して何かないかをさぐっていくことにした。すると、活動で訪問をしていた施設の方々がみんな口を揃えて言っていたことが、「活動資金の枯渇」という厳しい現状であり、施設運営にあたる問題点として目立っており、そして今回のサービスランニングの活動の振り返りで浮き上がってきたのである。

私はこれをふまえて、福祉施設は「地域とのつながり」が長所であることと、それに対し先ほどあげられた「活動資金の枯渇」が短所であるということが明確になり、分かってきたのである。また、サービスランニングの活動での施設への訪問時に代表者から聞いて書き込んだヒアリングシートを今一度比較してみると、各施設や団体の助成金などの資金援助額にも大きく差が生じているということが分かってきたのである。これによって、福祉施設の中では貧困な施設と裕福な施設との差が大きく生まれてしまっていることが分かったのである。

そこで私は、工夫次第では自分なりに考えた長所の「地域とのつながり」を利用して、短所である「活動資金の枯渇」を助けて補えることができるサービスを開発することができれば、問題解決の可能性がもしかするとあるのではないのかと思ったのであった。将来的にはそのサービスがつくられている可能性もあるのかも知れないと思う。

SLの体験を通して分かったNPOについて

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 永田貴大

活動先：地域福祉サポートちた

岡本ゼミ

① 自分の成長と気づきについて

私は、サービラーニングに参加してみるまではこんな活動が何のためにあるのか、なぜこんなことをしないといけないのか疑問であった。しかしいざ活動を行ってみると、自分が想像していたよりもはるかにいい活動であり、自分の成長のために良い経験となるものである。自分はサービラーニングで15団体にインタビューをさせていただいたが、そのアポイントであったり質問の内容について考えたりしたことは、成長したと感ずることが出来る点である。今まではあらかじめ用意されていたものに取り組んでいたが、自分たちの手でその土台を作るというのは初めての経験である。そうやって自分たちが自分たちの興味のあることを自分たちで創造しながら出来るサービラーニングはいい活動である。自分の成長で気づいたことは、ほかの人を引っ張る力である。今までの自分というのは、面倒であることから逃げるために、自分から提案などをしないまま楽をしているだけであった。しかしこの活動では、誰かが一人でも楽をしてしまうという作品はできないのである。みんなが全力を尽くして頑張ることによって最高の作品ができるのである。



またゼミの初回で決めた成長目標である「視野を広げる」ということは、いい目標であった。サービラーニングで様々な人と関わりがあったことが、自分だけでは考えることができなかった考え方や着眼点について新しい知識が増え、視野の広がりを感じるきっかけである。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

サービラーニングでは、NPO15団体にインタビューをしたがどの団体も課題として挙げられたのは、お金が足りないなどのお金に関することや人が足りないなどの人材に関することである。お金が足りないNPOは多数あり、その団体は活動がギリギリである。

右記の写真は実際に活動した時に撮影した写真である。この団体は、団体設立時から2頭のヤギを飼育していてヤギたちは、市民の要望に応えることができる。このヤギたちにある依頼は、田んぼの雑草を食べてほしいとかである。このヤギたちの仕事は、草を食べることでありいつも素晴らしい仕事をこなしている優秀なヤギたちである。この団体では、

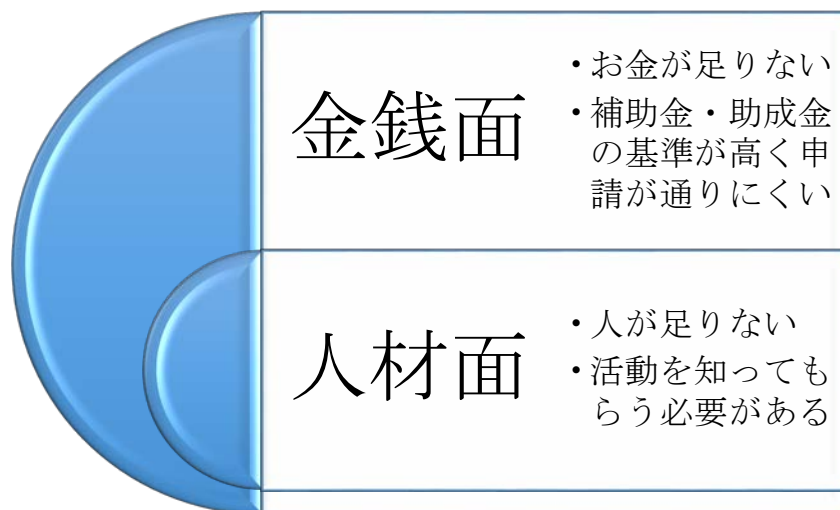


精神障害のある方が生きていくうえでの苦労や生きづらいに寄り添い、ゆっくり生きていく手だてを一緒に考えるために設立されたのである。ピスターリの活動で社会復帰をして社会に貢献することができるのである。実際に活動中に掃除に来ていた人がピスターリの人であった。こうした人が増えていくことで障害を持つ人が社会にいいイメージを持つことができるのである。

インタビューしたのは知多市内の 15 の NPO である。(南粕谷ハウス、ゆいの会、アスペディア、びすた〜り、こころん、Cat&Community、サポートネットゆっか、フォー・シニアーズ、にほんごの会、だいこんの花、ちたビジョンプロジェクト、Bumpy Company、チーム麺・メン、こだま、大人の学校同窓会)

この 15 団体を選んだきっかけは、団体ごとに活動している分野が違うため、そのすべての分野を調べてみたい、すべての分野の方に話を聞きたいと思い選んだ。しかしいざ実際に活動してみるとこんなにも選ばなければよかったと思うくらいハードで、少しくじけそうであった。しかしそれでも何とか完成させたいと思いしっかりと最後まで取り組んだのである。15 団体にインタビューをしてみると様々な課題が出てくるのかと思いきや、似たような課題ばかりであった。

右記の図は、NPO が抱えている問題である。インタビューをしていると皆さんの口からこのようなことが発言されたのである。金銭面の課題は、そのまんまである。人材面の課題として、「活動を知ってもらう」とあるが、これが非常に重要なので



ある。実際自分たちがアポを取る際にこんな活動があるのか、こんな団体があるのかと気づき、NPO は認知されていない確率が高いと感じた。なのでまず活動を知ってもらうことが、人手不足解消の大きな一歩となるのである。そのための方法としては、パンフレットの作成や口コミなどである。

サポートちたでサービスマーケティングを行うことができたことは、とてもいい経験であった。こんなにもたくさんの人とかわることができるのはめったにないので非常に良いものであった。



NPO法人と地域のつながりまた中間支援について

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 山田 涼真

活動先：サポートちた

岡本ゼミ

自分がサービスマーケティング先で選んだ活動場所はサポートちたという場所だった。そこでは中間支援というものを行っているという話を聞いてもあまりはつきりと意味を捉えることができなかった。しかしその後の活動で中間支援がどれほど大切なものなのかを気づかされた。サポートちたで自分たちが選んだ活動はサポートちたが提携している分野ごとに自分たちで探し興味を持った全15団体に実際にNPO法人に足を運んだり足を運んでいただきNPO法人の歴史や現状またサポートちたとのつながりまた現在困っていることなどを聞くことができた。

その中で気が付いたことはどのNPO法人さんもしっかりとした意思を持って活動されているということだった。しっかりとした意思と感じたものはみなさん本当に自分がやりたいと思ったことをやっているということである。

NPO法人たちの一番の困りごとで多かったことは金銭的問題だった。資金ぶりが厳しいというNPO法人は少なくなかった。その中でも様々な方法でお金をやりくりしているということも知ることができた。また他に挙げた問題としてはNPO法人の後継者不足だった。そのNPO法人では不登校になってしまっている学生さんの学習支援などを行っているNPO法人で授業料もギリギリまで削って資金をやりくりしており後継者も現在探しているとのことであった。

またびすたーり農園を訪れた際には現在地域には潜在的に困っている方が多くいる。しかしその当事者の方やそのご家族は地域にどういったNPO法人があるのかを知らない。また知っていてもどのような活動を行っているかまでは知らない方が数多くいるとおっしゃっていた。しかしNPO法人だからこそ柔軟にできることも数多くあることを知ることができた。そしてその中でサポートちたの活動はサポートちたの市民活動センターから始まり、廊下には各NPO法人の紹介コーナーがありその紹介コーナーではそのNPO法人の分かりやすい説明が一枚のカードに記入されているというものであった。またボランティア募集のチラシなどもおいてある。またたくさんNPO法人を回る中でサポートちたの中間支援は非常に多岐にわたるものだと気づかされた。中間支援とはNPO法人からの相談であったり、情報提供であったり、講演会であったり、人材の育成、つながりを作っていくことなどたくさんのこと行っていたと知ることができた。その中で自分がさらに学びたいこととして頭に浮かんだことは地域の方々により地域にあるNPO法人について知ってもらうにはどうしたらよいかということであった。

その後グループ内の活動で文献などを読んでいくと実際に福祉活動に興味がある人は多いがその気持ちをどこに持っていけばいいかわからない人が多いこと、NPO法人の存在は知っていてもその内容までは知らない人が多いこと、また市民が求めているNPO法人の情報とNPO法人の発信したい情報に差異があるということであった。まずは社会のニーズや課題に対して、市民自らが集まって取り組むことは大切か？との質問に対して、そう思うと答えた人は91.6%であった。しかしNPO法人の言葉を聞いたことがあると答え

た人が 69.3%に対して意味まで分かる」と答えた人は 19.7%だった。このことから現在の市民は社会のニーズや課題に関心がないというわけではないということが分かった。そのことから関心がる市民に対してその関心をさらに引き出せるような、また名前が分かっても具体的にわかってもらっていないNPO法人についてももっと知ってもらうことが必要だと感じた。そうすることによって関心があるだけで終わってしまっていた市民の社会のニーズや課題に対して、市民自らが集まって取り組むことも可能になってくることもあると考えたからである。

そのことが実現できた場合地域で住民同士の結束も強まりより積極的に地域にある問題に対して取り組んでいくことができるようになるのを感じた。市民が知りたいと思うことはNPO法人の活動内容やボランティア活動について、またその雰囲気についてを詳しく知りたいとあった。市民はより身近な情報が欲しいように思った。確かに実際にNPO法人やボランティアの雰囲気や活動について知ることができたならより気軽にNPO法人に立ち寄ることができるようになるのではと思った。

自分が秋にサポートちたでボランティアとして参加させていただいた福祉フェスティバルでは色々なNPO法人さんがブースを出しておりスタンプラリーなどのイベントなども催されていた。その結果スタンプを集めながらたくさんNPO法人についても知ることができるといったものだった。このようにイベントを催すことやネットを使った広告や、サポートちたのようにNPO法人の紹介コーナーを作ることやボランティアの紹介誌を置くことも非常に大切なことだと思った。そうすることによって地域の方々により身近にNPO法人の存在について知っていただけるようになるのではないかなと思った。その結果地域に眠ってしまっている今現在泣き寝入りしてしまっている当事者の方々も減っていくのではないかなと思った。

サポートちたでの活動を通して、まず知ることができたことは自分が知らない分野のNPO法人がこんなにもたくさんあったということである。そしてどのNPO法人も自分らしく活動しているということである。しかしその中にも問題があり、それは資金の問題であったり、人手不足であることを知ることができた。そしてサポートちたが行っている中間支援とは具体的にどのようなことなのかそれは非常にたくさんしたことだったが、学ぶことができる貴重な体験をすることができた。

サービスマーケティングが終わった後では実際にどうすれば地域で困っているが誰にも相談できずに苦しんでしまっている人を減らすことができるのか。そのことからグループワークでは「地域とNPOの連携」について調べ学習に取り組むことができた。その調べ学習ではまず初めにNPO法人に関する周知度と期待、そのあとにNPO法人の情報発信、また地域住民が欲している情報、そして実際にどのようにNPO法人について知ってもらえるかについて考えた。実際にどのようにNPO法人について知ってもらうかについてはサポートちたで学ばせてもらったようにNPO法人の紹介コーナーを作ることや、イベントごとの実施、また活動内容やボランティア風景の載ったチラシや紹介誌を作ることや現代ではネットからの情報発信も必要になってくると感じた。